中学生の短歌創作に関する実践的研究

植山　俊宏

Practical study on junior high school students' creation of tanka

Toshihiro UEYAMA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第２号 （2020年３月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.2（March 2020）

中学生の短歌創作に関する実践的研究

植山　俊宏
（京都教育大学）

Practical study on junior high school students' creation of tanka

TOSHIHIRO Ueyama

2019 年 11 月 29 日受理

抄録：短歌創作学習の現状を把握した上で、中学校国語教科書の分析を行い、短歌創作学習の担保と可能性について検討し、一定の指針を得た上で、短歌創作学習の試行実践について検討した。その結果、有効性が認められた。

キーワード：短歌創作、簡便性、利便性、アクティブ・ラーニング、歌会、結社誌、例歌

Ⅰ．中学校短歌創作学習の現状と意義

1. 学習指導要領における記述

小学校学習指導要領では、平成 20 年版、平成 29 年版ともに短歌創作に関する記述がある。平成 29 年版では、小学校 5・6 学年の「言語活動」の「例」として、「短歌や俳句をつくるなど，感じたことや想像したことを書く活動」が提示されている。

中学校学習指導要領では、平成20年版においては短歌創作自体に関する記述はなく、「表現のしかたを工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること」とあり、この中に含められている。平成29年版においては、言語活動の例として、「短歌や俳句，物語を創作するなど，感じたことや想像したことを書く活動」が示されており、短歌創作については、踏み込んだ記述となっている。これを重視するとともに、合理的な実践理論の整備、実践方法の提案が必要になってくる。

2. 中学校実践現場における現状

一般論的な論述になるが、中学校国語科における短歌創作は一般化していない。中学校対象の諸コンクールの衰退、実践理論の未整備、実践方法の未開拓などの要因に加え、創作学習に充てる授業時間の確保の困難さが重なり、十分な実践が行われていない。解釈・鑑賞にしても短歌に関しては教師の講義式の授業が多く見られる現状にある。一方俳句は、サイズの小ささから、少なくとも創作の実践は広く行われており、これは諸コンクールへの応募状況からも確認できる。1)

3. 短歌界からのアプローチ

衰退している現状にあるとはいえ、短歌結社、短歌サークル、短歌カルチャーセンターは数多く存在する。しかしながら、一般的には所属層の高齢化が進んでおり、若手、就学者の参加はほとんど見られない。わずかに全国紙、地方紙の新聞に必ず設けられている「歌壇」に投稿が見られる。これも定期的に投稿している児童・生徒は見受けられず、熱心な教師による短歌創作授業の成果を単発的に投稿している程度である。

実際に短歌結社の関係者に問い合わせてみても、細々としたコンクール等で中学生を見かけることはあっても、中学生一般が短歌に高い関心を持ち、意欲的に創作をしている例はほぼ見られないとのことである。ここでも同じ短詩形文学の定型詩であっても、俳句の手軽さとは一線を画しているようで人気の度合いが全く異なっていることが指摘できる。また短歌結社のアプローチとして、いわゆるジュニア欄を設け、投稿を促している歌誌もあるが、投稿者は固定しており、広がりがあるとはとてもいえない現状にある。

4. 総括および研究の目的・方法

学習指導要領では一定の指導内容の位置を確保している短歌創作だが、奮わないのが現状である。そうすると、学習指導要領における国語教育の方針と実践との間に乖離があることになる。この要因は、実践理論の未整備、実践方法の未開拓にあると考えていい。ここでは、中学生の等身大の創作の可能性、簡便な創作・創作指導について検討することを研究目的とする。ただし、創作後の評価方法については、稿を改めることとする。

研究方法として、短歌結社の関係者の短歌創作に関する意見・主張の検討、中学校国語教科書における短歌単元における創作学習の担保と可能性の検討、短歌創作学習の試行的実践例の検討を行うこととする。なお、中学校国語教科書は、現行の平成20年度版学習指導要領準拠のものを対象とする。

Ⅱ. 短歌創作教育の諸論―歌誌「心の花」の特集「短歌と教育」の検討―

日本最古の短歌結社及び歌誌発行の「心の花」は、令和元年5月号(通番1477号)において「短歌の継承―短歌と教育―」を特集した。5月号では、田中拓也、植山俊宏、中村佳文の教育関係者3名が論考を寄せている。

1.「創作活動の課題と意義」(田中拓也)

田中は、短歌創作学習の意義として、次のように述べている。

> 私は、これからの国語教育における創作活動の系統性を考えるうえで、まず定型詩の持つ「型」を通して表現する資質・能力を育んだうえで、自由詩の表現形式に取り組み方が児童の表現力の養成を図るうえで有効と考える。＜中略＞坪内が主張するように、「他人の目には何げない小さなもの、曖昧なもの、簡便なもの」を見つめる視点こそ、発達段階の早期の段階で養成すべき資質・能力ではないかと考える。

これは小学校教育に重点を置いた発言ではあるが、短歌創作学習の重要性を端的に示したものとなっている。

2.「短歌の教育的意義と価値」(植山俊宏)

植山は、短歌創作の価値と意義について、次のように言う。

> **8．短歌における自己表現の実現性**
>
> 突飛さは否めないかもしれないが、そうではない。短歌という形式とサイズに着目したい。そして、古来引き継がれてきた言語の良質性にも目を向けておきたい。
>
> ＜中略＞
>
> 短歌の場合は、三十一文字の使用が可能なため、最低限のストーリーを示すことができる。初心者にとって、という但し書きは付くものの、創作者が言いたいことを言い表せたという満足感を得ることは難しいことではない。一般に、日記を書くのは面倒で恥ずかしく、詩を書くのはストーリーの展開力や独創的な表現力が不足しているというのが児童生徒の現状である。その点、短歌は、一定のストーリーの表現が可能だし、先行する作品から発想や表現を借用することができる。積極的にフィクションの世界に踏み込めば、羞恥心も気にとめることなく、主体的な表現が可能である。短歌は世界一短い物語と考えたい。
>
> 比較的短時間で、創作者自身の主体性も確保でき、創作後の相互交流も自己実現の認め合いが前提となるので実施しやすい。

この指摘は、短歌創作の簡便性や利便性にふれつつも、「主体的な表現」の可能性を拓くものとして短歌創作学習を位置づけているところに意味が見出せる。

3.「対話と想像の力を短歌から教育へ」(中村佳文)

中村は、短歌の文化的な遺産を教育に活用することを提唱する。

> 短歌に「興味関心」を持った者が、「自己の人生」と関連付け、結社誌や歌会によって「見通しを持ち振り返りを次に活かす」という主体的な学び、同世代のみならず多様な職業の人々が交流し先人の短歌などを「手がかり」として、「読み（考え方）を比較」し「自己のみではできない気づき」をする対話的な学び。短歌の「特

質に応じた見方・考え方を働かせる」とともに、指導者が「教える場面」と参加者が「思考・判断・表現する場面を効果的に設定」する深い学び。」結社誌や歌会の場は、まさに「アクティブ・ラーニング」であったといってよさそうである。

これまでの短歌文化をダイナミックに総括し、その価値を教育に活かそうとする発想が大胆に提唱されている。創作と解釈・鑑賞を一体化させたアクティブ・ラーニングという考え方も有効性が高そうである。

4. 総括―短歌創作学習の意義と価値―

三者の主張を総括すると、短歌創作学習は、簡便性、利便性、創作の主体性、それにライブ的な文化性に基づくアクティブ・ラーニング的な学びということが浮かび上がってくる。理念的、理論的な総括により、短歌創作学習の意義と価値は確認できたと考えられる。

Ⅲ. 中学校国語教科書における短歌単元・短歌教材

―短歌創作学習の担保と可能性―

1. 分析･検討の視点

中学校国語教科書は5社から刊行されており、いずれも中学二年生教科書に短歌教材が掲載されている。各社の短歌教材（単元）の概要をとらえるとともに、創作学習の位置づけについて分析する。

従来型の解釈と鑑賞型の教科書として学校図書、光村図書、三省堂がある。ここでは主として学校図書を取り上げ、光村図書と三省堂については、特徴的な部分についてのみ考察する。

解釈と鑑賞から創作へ開く教科書として教育出版と東京書籍がある。ここでは主に教育出版を取り上げ、東京書籍については、特徴的な部分についてのみ考察する。

2. 従来型の解釈と鑑賞型の教科書―『学校図書　中学校国語２』―

（1）概要

短歌単元として、次の2編を掲載している。

「短歌」（説明・評論）では、佐藤正午の『ありのすさび』を引用し、次の1首を掲げている。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日　　俵万智

続いて、「短歌十五首」では、4テーマを設定し、15首を提示している。

（2）学習目標

冒頭の脚注の欄に、学習目標を2項掲げている。

最初の目標は、「▼短歌に込められた思いや情景を捉える。」である。

短歌文学は叙情、叙景を主眼とするととらえられており、その把握・理解を主な目標としている。この叙情・叙景は、「心と自然」のように「と」によって二者の関係として成立するものと考えられている。唯一「歴史と社会の中で」のみ、二者の関係を「中で」という状況として捉えようとする。基本的に、この目標からは、叙景を叙情に活かす、叙景の中に叙情を込める手法を学ぶ程度であって、有効な短歌創作の方法を学ぶことは難しい。

次の二番目の目標は、「▼短歌表現の工夫を捉える。」である。

この目標は、「短歌表現」や「工夫」となっており、やや漠然としているが、理解できると、創作学習の起点や応用のポイントとなるので、創作的な領域への発展を企図していると考えることができる。

（3）短歌教材

心と自然

くれなゐの二尺伸びたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨のふる　　正岡子規

秋草の直立つ中にひとり立ち悲しすぎれば笑いたくなる　　道浦母都子

振りむけばなくなりさうな追憶の　ゆふやみに咲くいちめんの菜の花　　河野裕子

あやまたず来る冬のこと黄や赤の落葉はほほとほほゑみて散る　馬場あき子

青春と歌

不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心　石川啄木

困らせる側に目立たずいることを好みき誰の味方でもなく　平井弘

観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日(ひとひ)我には一生(ひとよ)　栗木京子

わがシャツを干さん高さの向日葵は明日ひらくべし明日を信ぜん　寺山修司

歴史と社会の中で

たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて　ことしの桜　あはれ　散りゆく　釈迢空

遺棄死体数百といふ数千といふいのちをふたつもちしものなし　土岐善麿

砂あらし　地(つち)を削りてすさぶ野に　爆死せし子を抱きて立つ母　岡野弘彦

家族と命

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる　斎藤茂吉

眠られぬ母のためわが誦む童話母の寝入りし後王子死す　岡井隆

顔よせてめぐしき額撫でにけりこの世の名前今つきし子を　植田多喜子

のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ「まっすぐ？」そうだ、どんどんのぼれ　佐佐木幸綱

歌人は、正岡子規、石川啄木、土岐善麿、釈迢空、斎藤茂吉などの明治、大正、昭和戦前期に活躍した者から、寺山修司、河野裕子の物故した近現代歌人、活躍中の道浦母都子、栗木京子、長老クラスの馬場あき子、佐佐木幸綱などまで配置している。中には知名度の高くない平井弘、植田多喜子といった歌人も登用している。

テーマを5題設定している。いずれも短歌のテーマとして不変のものであり、中学生の特性が反映されてはいない。中でも「歴史と社会の中で」の3首は、いずれも戦争詠であり、偏重が認められる。

（4）学習の手引き

❶次の点で短歌に込められた思いや情景を捉え、交流しよう。
①「心と自然」のそれぞれの歌には、どのような情景と心情が表現されているか。
②「青春と歌」のそれぞれの歌には、どのような情景と心情が表現されているか。
③「歴史と社会の中で」のそれぞれの歌には、どのような歴史的・社会的状況と心情との関わりが表現されているか。
④「家族と命」のそれぞれの歌には、家族と命に対するどのような思いが表現されているか。

短歌が文学作品である以上、作品に込められたものを読みとるのは当然だが、いずれも「～と心情（思い）が表現されているか」となっており、従来の解釈型の理解学習に留まっている。

❷次の手順で短歌表現の工夫を捉え、交流しよう。
①自分が最も感動した作品はどれか。
②その作品のどの言葉に心を動かされたか。
③その言葉にはどのような工夫がなされているか。
④どのように音読すれば、感動や言葉の工夫が表すことができるか。

「感動」から「言葉」に対する反応、「工夫」の検討へと進み、最終的に「音読」により「表すことができる」となっており、短歌の特性である音律を重視した課題といえる。ただし、「自分が感動した作品」の「言葉に心を動かされ」ることが軸となっているため、普遍的に優れた短歌表現を見いだし、吟味する方向性は持っていない。

❸次の斎藤茂吉の連作「死にたまふ母」を読んで、「死に近き」の歌がどのような経過や心情の変化の中で歌われているか、考えて見よう。
みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
朝さむみ桑の木の葉に霜ふれど母にちかづく汽車走るなり
寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何か云ひたまふわれは子なれば

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる
我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ
のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり
星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり

茂吉の「死に給ふ母」を時系列で並び直して、経過を把握する課題であり、一種の整序問題になっている。結果的に七首が並列的に扱われることになり、特に秀歌と評価されている「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる」と「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」の結晶度の高い文学表現への着目がなされないことになってしまい、「かはづ」と「玄鳥」と「母」の「死」の取り合わせの効果が見失われることにつながる可能性がある。短歌の理解学習に留まり、創作学習へ開く道が狭くなると考えられる。

(5) 短歌創作学習の担保と可能性

解釈と鑑賞のポイントが、「心情」、「情景」にあるため、どうしても求心的な叙情歌、叙景歌が採録される傾向が強くなり、一首の私小説、日記文学的な要素が濃くなってしまう。そうすると、基本的には歌人と学習者それぞれは等身大的な大きさではとらえられない。作品の素材として取り上げられている事件、できごとは中学生が歩んできた人生の中で見いだすことは難しい。特に、戦争詠三首、「死にたまふ母七首」が核となっている以上、圧倒される感覚が生じるのは禁じ得ない。そこから短歌創作のヒントを得ることはまず考えられない。「青春と歌」のみ、やや中学生に近い感覚で捉えられるかもしれない。特に啄木の「十五の心」は中学生の年齢であり、訴えかけてくるものがあると思われる。としてもこの一首のみである。

3. 従来型の解釈と鑑賞型の教科書—『光村図書　国語２』—

(1) 概要

学校図書と同じく短歌単元として、次の２編を掲載している。

「新しい短歌のために」（馬場あき子・短歌・解説）では、次の５首を採っている。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨のふる	正岡子規
なんとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな	与謝野晶子
ただひとつ惜しみて置きし白桃のゆたけさを吾は食ひをはりけり	斎藤茂吉
海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり	寺山修司
思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ	俵万智

「短歌を味わう」では、次の６首を掲げる。

麦のくき口にふくみて吹きをればふと鳴りいでし心うれしさ	窪田空穂
白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	若山牧水
不来方のお城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心	石川啄木
つばくらめ空飛びわれは水泳ぐ一つ夕焼けの色に染りて	馬場あき子
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日（ひとひ）我には一生（ひとよ）	栗木京子
校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け	穂村弘

著名近代歌人の子規、晶子、茂吉、空穂、牧水、啄木の代表歌を採録している。現代歌人は、寺山、万智、馬場、栗木、穂村の作を採っている。寺山、万智、空穂に麦が共通しており、創作のヒントを与えている。

(2) 学習目標

冒頭の脚注の欄に、学習目標を１項掲げている。

「歌われている情景や作者の思いを想像しながら読み、内容や表現のしかたについて感じたことを話し合ってみよう。」である。できるだけ広げた目標となっており、鑑賞方法を強く規定するものではない。ただ、「作者の思いを想像しながら読」むは、作品中の人物が作者という前提になっており、フィクションに対する肯定度が弱く、作者遡上的な読みに誘導する可能性が高い。この点が読み解きの学習としても、創作学習の視座としては問

題となる。

（3）短歌創作学習の担保と可能性

光村図書の短歌単元は、解釈・鑑賞重視の設定となっており、創作へと導く学習の方向性は示されていない。ただ、採録されている歌は、等身大であり、重すぎるものはない。浪漫的といってもよいほどの作品を採る方針を具現化している。中学生が解釈・鑑賞の学習を通して、創作意欲を刺激されることは十分考えられる。

4. 従来型の解釈と鑑賞型の教科書―『三省堂　現代の国語２』―

（1）概要

三省堂の場合も、前二社と同じく短歌単元として、次の２編を掲載している。

「短歌の世界」（俵万智）では、次の２首を採っている。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ	俵万智
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日（ひとひ）我には一生（ひとよ）	栗木京子

「短歌十首」では、次の 10 編を掲載している。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨のふる	正岡子規
その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな	与謝野晶子
みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる	斎藤茂吉
草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり	北原白秋
白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	若山牧水
不来方のお城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心	石川啄木
葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。 この山道を行きし人あり	釈迢空
列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし	寺山修司
シャボンまみれの猫が逃げだす午下がり永遠なんてどこにも無いさ	穂村弘
細胞のなかに奇妙な構造のあらわれにけり夜の顕微鏡	永田紅

子規、晶子、茂吉、白秋、牧水、啄木、迢空といった著名近代歌人の代表作を採録している。安定感のある採録方針がうかがわれる。それに加え、現代歌人では、万智、栗木、寺山、穂村、永田紅の歌が採られており、万智、寺山のような定番的な代表作もあるが、穂村、永田紅においては斬新な作品を採用している。万智、寺山、穂村、永田紅の作品の解釈と鑑賞は、創作学習への意欲につながると考えられる。

（2）学習目標

冒頭の脚注の欄に、学習目標を２項掲げている。

最初の目標は、「短歌のリズムや表現方法などの特徴を理解して、作品の内容を捉える。」である。「作品の内容」の把握に対して、「短歌のリズムや表現方法を理解」することが前提条件になっており、短歌の特性を踏まえた解釈・鑑賞学習を導く意図が現れている。

次の目標は、「情景や心情を表す語句に注意して、短歌の世界を読み味わう。」である。こちらも「短歌の世界を読み味わう」ために「情景や心情を表す語句に注意」することが挙げられており、求心的な内容の把握、世界の受容に傾きすぎないように配慮していることがうかがわれる。創作意欲を喚起する機能はあると考えられる。

（3）短歌創作学習の担保と可能性

短歌創作学習の道は担保されているとはいえない。しかし、解釈・慣習重視の姿勢を見せながらも、不自然に心情に偏重したり、作者重視に陥ったりはしておらず、短歌の音律、短歌表現といった短歌の特性に着目させてから解釈・鑑賞に導くように図っている点からして、創作学習を展開しようとすれば十分その素地となる部分は確保できているといえよう。

5. 解釈と鑑賞から創作へ開く教科書―『教育出版　伝え合う言葉　中学国語２』―

（1）概要

短歌単元は、「近代の短歌」1 編で構成されている。「ふるさとの歌」、「母の歌」、「旅の歌」、「恋の歌」の 5 テーマで編成され、9 首を採録している。「近代」とあるように現代歌人の歌は提示されていない。学習のてびき（「みちしるべ」）に例歌として、5 首示されているが、こちらも吉井勇、若山牧水（再掲）、北原白秋、木下利玄、佐佐木信綱といった近代歌人の作品が挙がっている。

（2）学習目標

冒頭の脚注の欄に、学習目標を 1 項掲げている。「情景や心情を掘り起こし、声に出して短歌を読む。」である。シンプルに解釈･鑑賞を通して、「情景や心情を掘り起こ」すことを目標とする。「掘り起こ」すは、より生き生きと鮮やかに情景や心情を捉えると理解していいだろう。そうすると、情景や心情を実感的に捉え、それを声に表現するという単純な学習のすじみちが捉えられることになる。ここには、創作学習を促す記述は見られない。

（3）短歌教材

ふるさとの歌

やはらかに 柳(やなぎ) あをめる　　石川啄木
北上(きたかみ)の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに
ふるさとの 訛(なまり) なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴(き)きにゆく

帰らなむ筑紫母国(ちくしおやくには)早や待つと今呼ぶ声の雲にこだます　　北原白秋

母の歌　　斎藤茂吉

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
死に近き母に添寝(そひね)のしんしんと遠田(とほだ)のかはづ天に聞こゆる
のど赤き玄鳥(つばくらめ)ふたつ屋梁(はり)にゐて足乳根(たらちね)の母は死にたまふな

旅の歌

白鳥(しらとり)はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ　　若山牧水

恋の歌

なんとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜(ゆふづくよ)かな　　与謝野晶子
小百合(さゆり)さく小草(をぐさ)がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ

学習の手引き（「みちしるべ」）の欄に短歌の手法の例歌として、次の 5 首を挙げている。

●初句切れ（五／七・五・七・七）
　夏は来ぬ／相模の海の　南風に　わが瞳燃ゆ　わがこころ燃ゆ　　吉井勇
●二句切れ（五・七／五・七・七）
　白鳥は　かなしからずや／空の青　海のあをにも染まずただよふ　　若山牧水
●三句切れ（五・七・五／七・七）
　この山は　ださうさうと　音すなり／松に松の風　椎に椎の風　　北原白秋
●四句切れ（五・七・五・七／七）
　街をゆき　子供の傍を　通る時　蜜柑の香せり／冬がまた来る　　木下利玄
●句切れなし（五・七・五・七・七）
　ゆく秋の　大和の国の　薬師寺の　塔の上なる　一ひらの雲　　佐佐木信綱

白秋の 2 首、勇は教材として定番になっているとはいえない作品であるし、利玄の歌は他の教科書には採られていない。歌材は、叙景が多いものの、叙情歌もある程度見られる。フィクション的な歌は見られない。

（4）学習の手引き

1『近代の短歌』の中で紹介されている歌の中から、最も印象に残ったものを選ぼう。
2具体的な情景や行動を描く表現を抜き出し、それが作者のどのような思いや感動と結びついているか、話し合おう。
3「ふるさとの歌」「母の歌」「旅の歌」「恋の歌」の中から好きな歌を選んで、声に出して読み、五・七・五・七・七という定型の短歌のリズムを体験しよう。
4「ふるさと」「母」「旅」「恋」の四つのテーマを手がかりに、作者の心情を想像しながら、それぞれの短歌を読もう。

「最も印象に残った」歌を選び、「具体的な情景や行動を描く表現を抜き出し」、「作者の」「思いや感動」との結び付きを探る、という解釈・鑑賞の手順が示されている。自然な流れで短歌の世界が受容できるように図っている。ついで、「好きな歌を選んで、声に出して読み」、「定型の短歌のリズムを体験」することになっているが、これも新鮮な文学体験が味わえるように設定されている。さらに「テーマを手がかりに、作者の心情を想像しながら」「読もう」となっているが、これは作者に遡上していく旧来の方法の提唱となっている。

□短歌を作ってみよう
1　短歌の創作手順
①学校や家、通学路などで感じた「感動や気づき」を探してみる。
②探し出した「感動や気づき」を一、二文で書き表してみる。
③感動や気づきを表す「うれしい」や「きれい」などの言葉をそのまま使わず、表現を工夫する。
④少し誇張した表現や、想像したできごとを混ぜてみてもよい。
2　作った短歌を読み合ってみよう。
①友だちと作品を交換して、声に出して読み合う。
②友だちの短歌を読むときは、描かれている情景やできごとをできるだけ具体的に想像してみる。
③短歌として特徴のある表現を認め合い、簡単な鑑賞文を書いて交換する。

懇切に短歌創作の手順・方法を提示している。着想・発想レベルの確保、その言語表現のすじみちの提示、短歌的表現の工夫、フィクションの奨励など、現代短歌創作の原則を踏まえた手引きとなっている。また相互鑑賞の方法も簡略に示されており、利便性のある手引きとなっている。

(5) 短歌創作学習の担保と可能性

学習の手引きとして、「短歌を作ってみよう」が設定されており、中学生に可能な創作方法が丁寧に示されている。時間を要さない鑑賞方法も示されており、簡便な創作、相互鑑賞の学習が行えるようになっている。

6. 解釈と鑑賞から創作へ開く教科書—『東京書籍　新編　新しい国語２』—

(1) 概要

東京書籍の短歌単元は、「短歌を楽しむ」（道浦母都子）と「短歌五首」の2編からなっている。

「短歌を楽しむ」では、次の3首が採られている。

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に	与謝野晶子
海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり	寺山修司
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日(ひとひ)我には一生(ひとよ)	栗木京子

「短歌五首」では、次の短歌が示される。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇(ばら)の芽の針やはらかに春雨のふる	正岡子規
白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	若山牧水
不来方のお城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心	石川啄木
「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ	俵万智

基本的に歌数を絞ってあり、近代短歌、現代短歌のいずれも人口に膾炙した作ばかりである。このことは、編集方針で、各単元の扉に一首ずつ短歌（一首は和歌）を提示する方法を採っていることによると考えられる。

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり	岡本かの子
草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり	北原白秋
夏木立ひかりちらしてかがやける青葉の中にわが青葉あり	荻原裕幸
虹よ立て夏の終りをも生きてゆくぼくのいのちの頭上はるかに	早坂類
ほんとうにおれのもんかよ冷蔵庫の卵置き場に落ちる涙は	穂村弘
卒業生最後の一人が門を出て二歩バックしてまた出ていった	千葉聡

こちらは、かの子と白秋の歌が近代短歌の代表作である以外は、すべて現代短歌であり、際だって有名というものでもない。特に荻原以降の 4 首は実験的な作品と言ってもいいくらい現代性の高い短歌である。学習者との接点を探ろうとする意図が見える。

（2）学習目標

冒頭の脚注の欄に、学習目標を 2 項掲げている。

最初の目標は、「情景や心情を表す語句に注意して、短歌を読み味わう。」である。「情景や心情を表す語句に注意」することを前提条件として、「短歌を読み味わう」なので、従来型の情景・心情を捉える解釈・鑑賞ではあるものの、必要以上に短歌の世界に入りすぎないように配慮した目標といえる。創作学習にもつながる視点である。

次の目標は、「短歌の表現の工夫などを捉えて、鑑賞したことをまとめる。」である。「短歌の表現の工夫など」を「捉え」、「鑑賞」し、その成果を文章等に「まとめる」というものであり、言語化が到着点になっている。自分なりに捉えた短歌の世界を明確に言葉にし、共有等を図る狙いがあると考えられる。

（3）短歌創作学習の担保と可能性

単元末尾には、「短歌のリズムで表現しよう」という手引きがある。「１短歌の題材をみつける」、「２短歌のリズムに合わせ、描き方を工夫する」、「３清書して読み合う」の 3 段構成である。次の 6 首を例示している。

どうしても踏むのが惜しいまっさらなシロツメクサの輝く野原
話すこと見つからなくて押してゆく銀の自転車十四の二人
試験の日みんな余裕の顔に見え僕もしてみる余裕のふりを
ゆっくりと線路は右に傾いて君への駅へと続くタンポポ
金色の小さな円を描きつつ虻が飛び込む美術教室
見逃した球の悔しさ思い出し汚れたグラブ丁寧に拭く

短歌の特性をリズムとして、通常の短い文にリズムを与えて短歌とするという基本方針や、利便性・共有性の高い短歌創作の手順の提示と説明、身近な植物を中心に短歌の題材の発見から完成に至るまでの例歌の提示など、すぐれた短歌創作学習の手引きとなっている。

Ⅳ．短歌創作の実験的実践―宮城教育大学附属中学校における実験的実践―

1. 概要

平成 31 年 1 月 22 日に宮城教育大学附属中学校２年生 160 名に短歌創作授業を実践した。二クラス合同二時間連続の授業を二回繰り返した。結果として全員が創作を実現した。ここでは和歌と短歌は同類として扱った。2)

2. 実践の手順と方法―導入部分のみー

⑴導入―短歌の世界にスムーズに入る・短歌の知識の共有―

○1400 年の歴史を持つ詩の方法／○短詩形は古代日本語のリズムの継承／○皇族も貴族も民衆も作った／○目で読む 1900 年頃短歌（口語）に変化

⑵花鳥風月を中心に季節、恋などを読む

視覚以外の感覚（香り・声・音・味など）

（例歌）街をゆき子供の傍を通るとき蜜柑の香せり冬がまた来る　　木下利玄

利玄は子どもとすれ違ったコンマ０．何秒のできごとを捉え、短歌にした。その感覚の働かせ方が大事である。

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　　よみ人知らず

1000 年前にも香りを詠んだ和歌があることを示した。利玄との違いは瞬間の切り取り方である。

3．実践の内容

⑴エクササイズ１―短歌入門―

グループで、指定された下の句にふさわしい上の句を創作し、短歌ゲーム（ベストワンをねらえ）を行った。「今日は何だかいいことありそう」を下の句として、上の句の創作に取り組んだ。

▽生徒作品

朝ご飯もやしナムルがでてきたよ　今日は何だかいいことありそう

鯖缶の賞味期限が誕生日　今日は何だかいいことありそう

⑵エクササイズ２―「冬の月」を描く―

啄木作品をヒントに短歌を創った。

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

釧路の海の冬の月かな　　石川啄木

結句の「冬の月かな」を指定。仙台市、宮城県、東北の「冬の月」を短歌に描く。

生徒たちは、それぞれのマイスポット、マイタイムをうまく織り込んでオリジナルの短歌を創作した。

最終ラウンドは、自由題による個人創作を行い、全員の短歌を掲示した後、秀歌を講評し、共有した。

4．総括

総括すれば、自分なりの言葉を用いて、自分が表現したかった世界をフィクションも交えて創作したことの価値は大きかったといえる。長時間の準備は必要なく、二時間で一人三首詠めることを実証したことにもなろう。

Ⅴ．結語

最も直近の短歌創作学習に関する論考の検討､学習指導要領の検討を通して､その意義と価値を確認した上で、中学校国語教科書における短歌単元の分析を行い、短歌創作学習の可能性について検討した。その結果、論考、学習指導要領ではその意義と価値は唱えられていること、中学校国語教科書においては、解釈と鑑賞重視の学習内容を持っており、短歌創作学習へと開いていく道が確保されていないことが明らかになった。その中で中学生との距離が遠い例歌の使用が見受けられ、この距離感の解消が一つの課題であることも見出せた。ただ、5 社中 2 社では、丁寧な短歌創作の手引きが設けられており、全く軽視されている状態ではないことも判明した。

これらの検討に合わせて、試行的に実践した短歌創作学習について分析し、短歌創作学習の一定の成果について確認を行った。以上のことから見出された知見として、今後、より簡便で利便性が高く、学習者の全員参加が可能な創作学習の理論的整備と合理的な実践方法の開拓を続けていく必要があることを結論とする。

［注］

1)短歌に関しては、「与謝野晶子短歌文学賞」(産経新聞主催・堺市共催)の休止(2018)など。

2)宮城教育大学附属中学校(遠藤仁校長(宮城教育大学教授併任))からの依頼に基づく提案授業。

［引用文献］

『心の花』第 1477 号．竹柏会編集発行（編集発行人：佐佐木幸綱）．2019.5．PP36-49

植山俊宏「短歌の教育的意義と価値」PP36-39

田中拓也「創作活動の課題と意義」PP40-43

中村佳文「対話と想像の力を短歌から教育へ」PP44-49